Nippon Bauhaus Society
Bauhaus
Bauhaus magazine

バウハウスと YouTube

お茶の水女子大学名誉教授
田中　辰明

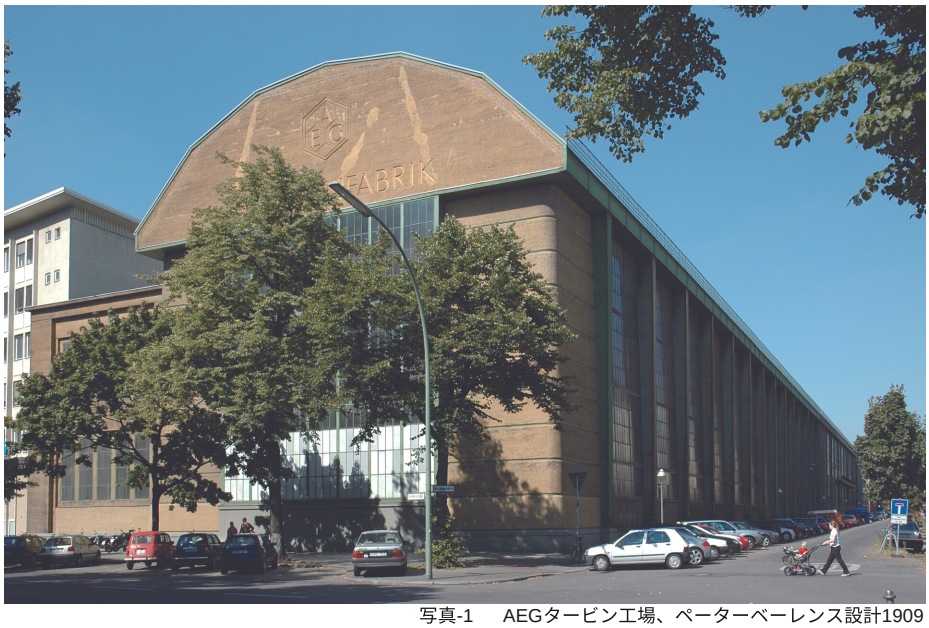

写真-1　AEGタービン工場、ペーターベーレンス設計1909

1.バウハウスとドイツ・ヴェルクブンド

ドイツヴェルクブンドは1907年に設立された。その動機はプロシャ美術工芸学校連盟の支配人であった建築家ヘルマン・ムテジウス（Hermann Mutesius）が行った講演による。ここでムテジウスはドイツの工芸と産業は改革を行わないと衰退の一途をたどると警告を発した。ムテジウスは1896～1903年迄ロンドンのドイツ大使館付となり、大陸のユーゲンドシュティール（Jugendstil）の影響を受けなかった英国の住宅から合理性と単純性を学んだ。英国の産業革命で進んだ機械製品の取り入れを推進した。
芸術・産業・工芸・商業・各界のトップクラスの代表者を選び、品質の向上を目指そうとした。当時英国からドイツは英国製品と似たような製品を作るが質が悪いので製品にドイツ製　(Made in Germany) と記すように要求されていた。この恥辱を晴らすために、品質の向上を目指して作られたのが「ドイツヴェルクブンド」であった。
発足時にはヘルマン・ムテジウス、ペーター・ベーレンス(Peter Behrens)、ヘンリー・ファン・デ・ヴェルデ（Henry van de Velde）,政治家フリードリッヒ・ナオマン（Friedrich Naumann）らが発起人であった。またAEG社の社長エミール・ラテナウ（Emil Rathenau）、ヴァルター・ラテナウ　(Walther Rathenau)　父子はドイツヴェルクブンドに理解を示し、建築家ベーター・ベーレンスを同社顧問として招聘した。そして、タービン工場（写真-1）のみならず、同社の製品である扇風機、（写真-2）ティーポット、広告ポスター（写真-3）の制作をベーレンスに依頼した。工業デザインの始まりであった。
1910年にブルーノ・タウト、ヴァルター・グロピウスがドイツヴェルクブンドに入会し、活躍した。グロピウスがバウハウウス初代校長になるが、バウハウスにドイツヴェルクブンドが多大な影響を与えた。単純化、工業化、大量生産といった思考がバウハウスに入ってきた。しかし1920年代はバウハウスでの活動が活発化し、ドイツヴェルクブンドはむしろバウハウスの影響を受けるようになった。ドイツヴェルクブンドが品質の向上を目指したので、Made in Germanyは品質の優れた製品の代名詞になった。

写真-2　AEG 社扇風機
ペーター・ベーレンス設計

2. バウハウスの発足時の時代背景

町には傷痍軍人、失業者があふれていた。1918年ドイツが思わぬ敗戦をした第一次世界大戦後のベルリンである。時の皇帝ヴィルヘルム２世は同年オランダに亡命し、キールの水兵の反乱によるドイツ革命と共にドイツ帝国は消滅した。ヴァイマール共和国が発足したが、ヴェルサイユ条約により、多額で支払い不能な賠償金が突き付けられていた。
激しいインフレも起こり、国民の心は疲弊していた。1919年に発足したヴァイマール共和国は国民に再び希望を抱けるように腐心した。その一つが国立の芸術学校を作り、諸外国から一流の芸術家を集めて教育を行うというものであった。
首都ベルリンには皇帝はいなくなったが戦争を主導した軍部と将校、官僚、皇帝の近衛兵、警察組織は残っていた。これに対応する労働者組織との小競り合い、テロも頻発した。

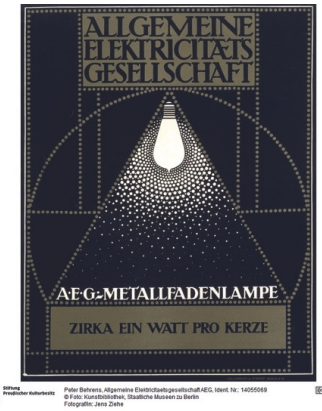

写真-3　AEG 社ポスター
ペーター・ベーレンス作

そこで芸術学校は首都ベルリンではなく、ヴァイマール憲法の草案が練られたヴァイマールに作られた。それがバウハウスであり、校長としてヴァルター・グロピウスが迎えられた。グロピウスはアルフェルドのファーグス靴型工場（写真４）の実績により、校長に推挙された。

バウハウスの教員として参加したパウル・クレー（Paul Klee、1879-1940、スイス）、オスカー・シュレンマー(Oskar Schlemmer、1888-1943、ドイツ)、ヴァシリー・カンディンスキー（Wassily Kandinsky、1866-1944，ロシア）、ライオネル・ファイニンガー(Lyonel Feininger、1871-1956，米国)などはこの時代を代表する芸術家である。これに加え、芸術教育に力を入れた教員がいる。ヨハネス・イッテン（Johannes Itten、1888-1967、スイス）、ヨーゼフ・アルバース（Josef Albers、1888-1976、ドイツ）、ラスロ・ナホリ＝ナギ（Laszlo Moholy-Nagy、1895-1946ハンガリー）、グラフィックデザイナー、ヘルベルト・バイヤー（Herbert Bayer 1900-1985、オーストリア）等がいた。ヨハネス・イッテンは最初に教育学を学びその後絵画を勉強している。芸術は天性のものと考えられていた時代に、教育によってある程度の域に達することが可能であるとした。彼らの業績は現在も芸術教育に大きな影響を与えている。

これに加えて初代校長はヴァルター・グロピウス(Walter Gropius,1883-1969,ドイツ)、３代目校長はミース・ファン・デル・ローエ(Ludwig Mies van der Rohe、ドイツ、1886-1969)で、この２名は近代の４大建築家に名を連ねる。こうなると、二代目の校長ハンネス・マイヤー（Hannes Meyer、1889-1954,スイス)[2)]の影がどうしても薄くなる。しかしハンネス・マイヤーは校長として精密な教育プログラムを作り、自らもベルナウの研修学校（写真-5）など素晴らしい作品を残した建築家である。

第一次世界大戦は1914年に始まり、４年間に及んだ。ドイツ国民の間には厭戦気分が漂っていた。
“インターナショナル”という事が言われるようになった。
バウハウスは1925年にヴァイマールからデッサウに移転する。
そしてバウハウス叢書第１号を発行する。ここに「国際建築、”International Architecture”」という校長グロピウスの論文が掲載された。これに呼応して日本でも建築家上野伊三郎を会長に1927年に「日本インターナショナル建築会」が結成された。グロピウスは工業技術の進歩が人類の建築の共通点を広げていくと主張した。
バウハウスでは沢山の女性も学び、女性が手に職を得た。[3)] 徐々にナチスが台頭すると、「ドイツ人でも食えない人がいるのに外人教師に高賃金を支払うバウハウスは國民の敵である」として弾圧されるようになった。
結果、バウハウスは1933年に解散し、１４年の歴史を閉じた。グロピウス、ミース・ファン・デル・ローエは米国に亡命し鉄とガラスの超高層建築を手掛け、それが現在世界の標準となっている。
その他工芸品、椅子のデザイン、舞台、絵画、彫刻、芸術の教育法などで、世界に多大な影響を与えた。

初代校長グロピウスは個性豊かな芸術家を取りまとめて大変うまく学校経営を行った。グロピウスはシャロテンブルグ工科大学（現在のベルリン工科大学）を出身し第一次世界大戦に出兵している。
若くして多くの兵士を率い、ここで人心掌握術を学んだようである。
ヴァイマールで1923年に、それまでの成果を発表すべく展覧会が開かれた。その一環としてアム・ホルンという場所に実験住宅（写真-6）の建設が行われた。これは後世のプレハブ住宅のモデルとして高く評価された。
これはゲオルグ・ムッヘが構想をたて、アドルフ・マイヤーが実施設計を行なっている。
ここの子供部屋はアルマ・ブッシャーという女性が設計をしている。
それまでドイツ建築の屋根は切妻や寄棟の傾斜があるものが普通であったが、アルマ・ブッシャーはグロピウスに陸屋根の使用を提案している。
当時、断熱と防水を同時に行う技術は無く、当然雨漏りが予測された。
しかしグロピウスは若き女性建築家の提案を受け入れ、陸屋根を採用した。
それ以降バウハウスの建築は陸屋根が採用されるようになった。それまでは屋根は日射熱を遮る日傘と雨をよける雨傘の役割を果たしていた。

写真-４

写真-5

写真-６

写真-４．アルフェルドのファーグス靴型工場
ヴァルターグロピウス設計

写真-５．ベルナウの研修学校
ハンネス。マイヤー設計

写真-６　アム・ホルンの実験住宅
ゲオルグ　ムッヘ企画

屋根裏部屋が設けられ、そこで、洗濯物が干された。屋根裏部屋の床で断熱が施されていた。この断熱材は日射や雨水により損傷される事もなかった。グロピウスは現在では陸屋根は雨漏りが発生する可能性は大いにあるが、防水技術者や断熱技術者が必ず、技術開発を行い、問題を解決すると考えて、陸屋根の採用に至ったのである。提案者ブッシャーにしても、場合によっては受け付けられないであろう提案を受けてもらい、ますますやる気を出して子供の玩具の開発を行った。現在ではどうであろう。我が国ではTQCを異常に長い間、行ってきた。これは日本が成長を止めてしまった30年間と一致する。優秀な現場管理者も書類管理に追われる日々を過ごすようになった。失敗のないことが優先し、思い切った技術開発は行われにくくなった。

1933年にバウハウスが解散すると色彩論を専門としていたヨーゼフ・アルバースは米国の芸術学校、ブラック・マウンテン・カレッジから教授として招聘を受けバウハウスの思想を米国に伝えた。
ラスロ・ナホリ＝ナギも米国に渡り、ニュー・バウハウスを設立し、バウハウスの思想を米国に伝えた。

3.バウハウスとプロテスタント

バウハウスが発足したヴァイマールはマルチン・ルターが幽閉されながらも保護されギリシャ語の聖書をドイツ語に翻訳したアイゼナッハ(Eisenach)のヴァルトブルグ (Wartburg)(写真-7)(写真－8)から100kmの距離にある。またバウハウスが1925年に移転したデッサウ（Dessau）はマルチン・ルターが95ケ条の論題を張り出し宗教改革を行ったヴィッテンベルク(Wittenberg)の城の教(Schloßkirche）(写真－９)から30kmくらいしか離れていない。バウハウスはプロテスタントの強い影響を受けて教育を行い、芸術作品の制作を行ったという事が言える。ではプロテスタントの信条とは何か？マルチン・ルターの言葉から拾ってみよう。

１.たとえ明日世界が滅亡しようとも、今日私はリンゴの木をうえる。	１． の言葉はパウル・クレーが不治の病に罹り、闘病生活を送りながらも死の直前まで絵画を描き続けたという点にもあらわれている。
２.嘘は雪玉のようなもので、長い間ころがせば転がすほど大きくなる。	２． の言葉はバウハウスの学校運営は非常に厳しいものがあったが、嘘は存在しなかった。 それゆえバウハウスは教育の場を変えつつも教員、学生がついてきた。
３.死は人の終末ではない。生涯の完成である。	３． パウル・クレー初め、多くのバウハウスの教員は最後まで芸術作品の完成を求め制作にあたった。
４.希望は強い勇気であり、新たな意思である。	４． ヴァシリー・カンディンスキーはモスクワ大学法学部出身というエリートであったが、芸術を目指して、ミュンヘンにやってきた。第一次世界大戦が勃発すると、敵国人という事で、ドイツに滞在しにくくなり、一旦モスクワに戻っている。しかし終戦になると再び自由のあるドイツにもどっと来た。しかしナチスが政権をとると、フランスへ渡っている。大変な目にあいながらも希望を失わず、絵画の制作をつづけた。
５.良い結婚よりも、美しく友情があり魅力的な関係や団体、集まりはない。	５．は良い家庭を築くことが良い社会を築く原点であることを説いている。バウハウス教員は一概に良い家庭を築いていた。
６.酒は強い。王は更に強い。女は更に強い。	６． バウハウスでは女性が大活躍をした。女学生は建築や絵画を勉強しようとしても許されず、バウハウス発足２年目に女子部が創設された。女学生は予備教育を終えると女子部に所属させられた。それは織物部で、あたかも織物工場の女工であった。女子学生は来る日も来る日も機織りに専念させられた。これもプロテスタントであるからできたことである。プロテスタントの思想は同じ仕事を毎日やる、大量生産を行うと言った事に向いていた。女子学生は悪い条件でも頑張り、ヨハネス・イッテン、パウル・クレーから予備課程で学んだ知識などを生かし、素晴らしいテキスタイルを生産していった。

4.バウハウスとYouTube

以上解説したようにバウハウスは非常に幅広く、かつ奥行きの深い内容を持っている。なかなか一口で「バウハウスはこういうものであった」と説明するのは難しい。日本バウハウス協会では現在の所、次のようなYouTubeを作成し、発信している。協会のホームページからアクセスして頂きご覧いただける。

1.バウハウスとパウル・クレー（４編）
2.バウハウスとヴァシリー・カンディンスキー（３編）
3.バウハウスとヨハネス・イッテン
4.バウハウスとヨーゼフ・アルバース
5.バウハウスとグンタ・シュテルツル
6.バウハウスとヘルベルト・バイヤー
7.バウハウスとラスロ・モーリー・ナギー
8.バウハウスと建築
9．バウハウス㊙女性達
10．バウハウス教員（マイスター）の作品を語る
以　上

写真-７　アイゼナッハのヴァルトブルグ

写真-８　マルチン・ルッターがギリシャ語の聖書を独訳したと伝わるルーターの小部屋

写真-９　マルチン・ルッターが９５ケ条の論題を張り出し宗教改革を行ったヴィッテンベルグの城の教会

参考文献
1）田中辰明　「世界文化遺産アルフェルトのファーグス工場」月刊建築仕上技術2014年2月号
2）田中辰明「バウハウス２代目校長ハンネス・マイヤーによるベルリン郊外ベルナウの「同盟研修学校（Bundesschule, Bernau）」月刊建築仕上技術2019年３月号
3）田中辰明　「バウハウスと女性たち」婦人之友2020年3月号
4）田中辰明　「ハインリッヒ・チレが描いた労働者階級のベルリン近代史-ヒトラー出現まで」1巻、2巻アマゾンより電子出版